

中国の医療と文化

2009年2月

M I C かながわ
中国語医療通訳勉強会

1 医療事情

中国は地域によって医療事情は違う。基本的に、台湾では全国民が保険に加入しているが、香港では健康保険制度が浸透しておらず、又、中国では都市部と地方によって格差も大きいようだ。

医療の考え方には、台湾、香港及び中国本土とも大きな差はない。

一般の人は病気になったら病院に行くが、貧困層とあまり教育を受けていない人々はお寺の霊能者に頼る。お札と焼香の灰が万病に効く薬と考えられている。

多くの一般人は病院へ行く前に、街の薬局で売薬（調和済みの薬）を買って飲む。処方なくても手軽に買える薬はたくさんある（利尿剤等）。中国の薬局では自分から要求して、点滴してもらうことも可能。又、普段から漢方薬を飲む習慣がある。

結核、A型、B型肝炎は国民病として認識されていて、病気の治療方法として、服薬よりも注射となる（服薬の効き目が緩慢で一般的に好まれない。日本でも処方された薬を説明通りに飲まない自己判断をする人も多いが）。強い薬を飲む時は、肝素（肝臓を守る薬）も一緒に飲む。

入院では、家族が看護する。入院中の食事も家族が作って食べさせるのもかまわない（選択できる）。

風邪を引いた時には熱い風呂に入って、熱と汗を一緒に出してから寝ると良い。

受診時の診察室は流れ作業のようで、患者さんのプライバシー配慮などほとんどない（最近、患者さんが日本の病院で感動したこととして、採尿する時に、トイレの中にそのまま尿を収集できる小窓があったこと）。

本人のカルテと入院記録は病院側が管理するが、病歴だけ患者さんが持ち帰ることも可能である。レントゲンのフィルムは患者さんが持ち帰るほかに、病院側も保管している（万一のため、たとえ患者さんがそのフィルムをなくしたときや医療事故のときに裁判で提出する必要があるときを想定して）。

病院では、知り合いの医者がいれば、並ばなくてもすぐに診てもらえる。検査の場合も同様。

入院する場合は、ある程度のお金（押金という）を払わないと入院できない。たとえ緊急の場合でも「押金」を払う必要がある。

救急車は病院側が所有している。消防署ではない。

中国の病院には、もう一つの特徴がある。特別料金を払えば医師の指名もできるということ。医師のランクによって追加料金が違う。

台湾、香港地域では日本の病院と同じように、会計は最後に行うのだが、中国の病院では、その都度お金を精算（支払い）してから検査や診察を受ける。

2 食事の文化

南部の人々の主食は米、塩味、大量の味の素と油。北部の人々の主食は小麦粉（麺類、中国式蒸しパン（マントー）で、味付けは香辛料が多い。おかずの肉類は牛肉より豚や鶏肉が中心となる（牛は畑を耕してくれる大切なものという農業社会の伝統からなのか）。魚や海鮮類もよく食べる。漢方関連の食文化も大事にしている、食材に対して体に冷、熱の区別がある。

3 出産の文化

大陸では結婚する前に、健康診断をする（特に性感染症方面）。その証明書を持って、結婚を申し込む。

妊婦検診は、妊娠判明時と出産予定日前の2回のみ。妊婦健診や産後検査は、会社に勤務している人は医療保険で支払うが、そうでなければ全部自費になる。分娩経費も出産助成金の制度がないので、すべて自費になる。

妊娠中に体重が増えすぎても気にしない。赤ちゃんに影響があるという認識は薄く、むしろ赤ちゃんが小さいことに心配する。

金持ちには帝王切開が流行している。理由は計画出産ができ、事前に風水（赤ちゃんが生まれる日のベストな方向や時刻など）に合わせることができる。

生後1ヶ月間は、保養の為に母親は授乳以外、家事も入浴やシャンプーも一切しない。

中国では結婚しても苗字を変えない人が多いため、出生届に母親と子どもの苗字が異なることはよくある。新生児の戸籍登録は基本的に出生後一ヶ月以内に母親側に登録（両親の戸籍が別々の場合）する。中国では簡単に戸籍の移動ができない。特に、農村の戸籍を持っている人は都会の戸籍を持っている人と結婚し、その都会に戸籍を移動しようとしても、できないケースは多い。同じ町と同じ身分の場合は大丈夫。）

子どもの予防接種はすべて自費になる。そして、小学校に入るときにその予防接種した証明書を見せる義務がある。

4 国民性や習慣

中華5000年の歴史を背景に、ささいな事には気にしない人が多い。相手の立場にたつてものを考えない、自分の思いはストレートに相手に伝える、自己中心と思われるが、

性格はさっぱりして小さな事にこだわらない人が多い。普段は家族を大事にするが、普通の知り合いにも親切過ぎて、時として親族との区別がつかない性格の人もある。

[M I C かながわ中国語医療通訳勉強会メンバー]

五十嵐しづえ、後藤月玲、佐藤ペティ、清水秋恵、宋清、後岡和代、古山季玲、正好照子、森本百合、李思薇